平成２９年度　学校評価総括表　　伊丹市立　荒牧中学校

教育目標	自主、自立、感謝の精神を抱き、未来を拓く生徒の育成　～豊かな心、確かな学力、健やかな体を育てる～
重点目標	①確かな学力の育成　②豊かな心・健康な体の育成　③開かれた信頼される学校づくり

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	基礎・基本の徹底と授業改善	・指導方法の工夫改善を図る。 ・補習や補充学習を充実する。	・「学習意欲（聞きたくなる・考えたくなる・伝えたくなる）を湧かせる学習活動」､「学力を身につけさせる言語活動を重視した学習活動」についての研修会や授業研究をもとに、全教職員が指導方法の共有をはかり、教員１人ひとりが指導方法の改善を行っていく。 ・校内研修として全ての教員が年1回以上授業を公開する。 ・公開授業後の教師同士の事後研究会が持てるよう、授業評価表を作成し活用する。 ・公開授業において、できるだけ多くの教師が参観できるよう、公開授業の時間に校内巡視がある場合は、公開授業を優先する。 ・終礼学習，ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ・ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞを実施し、基礎学力の定着を図る。	・全ての教員が年１回以上公開授業をする。 ・生徒アンケートにおいて、「授業はわかりやすく楽しい」と回答した割合が80%以上になる。 ・生徒アンケートにおいて、「先生は、教え方にいろいろ工夫している」と回答した割合が90%以上になる。	B	・４月に公開授業の予定を立て、年１回以上の公開授業を実施している。 ・公開授業と校内巡視が重なっている場合は，授業参観を優先したため、「教師間の参観が充分にできていない」は改善できている。 ・月１回の授業に関する校内研修会については、教科・学年の枠を超えて職員全員で取り組めている。 ・生徒アンケートにおいて、「授業はわかりやすく楽しい」と回答した割合が78%(前年度77%)、「先生は教え方にいろいろ工夫している」と回答した割合が89%(前年度86%)となった。数字は必ずしも上がっているとは言いがたい。この結果を謙虚に反省し，研修会や授業研究をもとに、教員一人ひとりが指導方法の更なる改善を行っていかなければならない。 ・引き続き、全教科の振り返り学習を研究・強化し、各単元の理解力を上げる取り	・昨年度と同様、「学習意欲(聞きたくなる・考えたくなる・伝えたくなる)を湧かせる学習活動」、「学力を身につけさせる言語活動を重視した学習活動」についての研修会や授業研究をもとに、全教職員が指導方法の共有を図る。 ・若い教師が増えているため、中堅・ベテラン教員で連携し、授業力向上に加え、学級経営のための研修を活発におこない、若手教員が学べる体制作りを、あらゆる分掌と連携して行っていく。 ・これまで研修を重ねてきた学習形態や学習活動を活かしつつ、生徒が主体的に活動できる授業や学級活動の研究・研修をおこなっていく。 ・毎日１０分間の終礼学習、放課後学習会などの補充学習を引き続	・子どもたちにとってどういった授業が分かりやすいか、わかりにくいかを検証する必要がある。授業改善の根幹ともいえることなので各教員が意識して取り組む必要がある。 ・コミュニケーショントレーニングの取り組みはすばらしいが、定期テストに反映できればよいと思う。 ・「めあての明示」、「振り返り活動」を徹底していくことが大切である。
	学習習慣の獲得	・家庭学習を充実させ、学習意欲を向上させる。	・家庭学習の手引きを活用する。 ・長期休業中、放課後、土曜休業日の補習学習の充実に取り組む。 ・My学ノートの内容充実を図るため、低学力の生徒には基礎プリントを用意する。 ・学期ごとに各教科の学習内容と家庭学習の方法をプリントにして配布する。保護者とも連携して、より一層家庭学習を充実させる。 ・生徒が主体的にMy学を行うよう取り組む。	・毎日の家庭学習の時間が１時間以上の生徒を70%に増加させる。	C	・毎日の家庭学習の時間が１時間以上の生徒が62.9%で、70%には満たなかったが、前年度より1.4%増加した。 ・家庭学習を２時間以上している生徒が17.8%から24.8%と7%増え、意欲的に取り組む習慣がついてきた。 ・１時間未満、全くしない生徒に対しての指導、具体的な手立てを考えることが課題である。	・各教科ともに欠かさずWEEKLY宿題の提出を徹底する。 ・学期ごとにWEEKLY宿題の計画を提示するなど、生徒にも家庭学習の見通しを立てさせる。 ・提示の方法や提出の仕方を整理するなど、WEEKLY宿題に対する教師間での共通理解を図る。	・家庭学習の基盤は家庭にある。家庭の協力なしでは効果的に取り組めない。啓発活動が大切ではないか。 ・教師側も宿題の出し方について考える必要がある。また、親に分かる宿題の出し方も検討すべきである。 ・教師が学習の遅れている生徒に対して、期間を決めて学習をみるおぎない学習を実施していくのも効果的である。
	読書活動の充実	・読書活動の習慣化、定着化を図る。 ・読書活動を充実させ、語彙力の獲得を図る。	・給食導入により昼休みの貸し出し冊数減が予想される。それを月・水・金の朝8:00～8:20までの開館を追加する。 ・各クラスに朝読書用集団読書を毎月ローテーションで配架する。 ・年度末に貸出数の多かった生徒を表彰する。 ・ビブリオバトルや読書紹介等を国語科等の授業で行い、各自の読書活動を見直したり、振り返る活動を取り入れ、各自の読書の幅を広げる。 ・国語科以外でも図書館を利用していく。 ・「図書館まつり・荒中古本市」等、PTAや各家庭への協力もお願いしながら図書館運営をすすめる。 ・「図書館だより」や「新刊案内」を工夫して、学校での取り組みを紹介し、家庭での読書習慣につなげる。	・貸し出し冊数一万冊	B	・12月末の貸出冊数は8741冊のため、目標の1万冊は達成する。しかし、昨年度からは10.4%減となった。(一昨年度は7520冊)また、5月～7月の月間貸出数の平均が1490冊なのに対し、9月～11月のの平均は734冊と半減した。給食開始による影響が大きいと考えられる。 ・生徒アンケートでは｢読書に力を入れている｣と答えた生徒が75.4%(昨年度74.8%)と同程度であったが、1年生は60.8%と低かった。また、保護者アンケートでは61.3%(昨年度65.8)だった。これも1年生は48.1%と低い。例年1年生は図書館の利用者数も少ないため、読書活動を活性化し、図書館利用を促していく必要がある。 ・給食開始に伴い、開館時間を変更したが、当番の徹底ができず、特に昼休みの当番が滞ることが多かった。 ・図書館まつりは、学習委員や図書ボランティアの方々と協力し、盛況に開催することができた。 ・修学旅行やトライやる・ウィークなどの行事の調べ学習では図書館の本を積極的に活用することができた。	・朝、昼休みの開館を継続するとともに、図書当番の活動がスムーズに動けるよう方法を工夫する。 ・集団読書用の図書を新たに購入し、朝読書の活性化を図る。 ・学習委員会と連携し、購入図書の選定や学級図書の増加、移動図書館など、生徒が読書に親しみやすい環境を整備する。 ・図書だより、学校だより、ホームページ等により学校で行っている読書活動について、保護者や地域に周知する。 ・校外活動用の資料が充実しているため、総合的な学習の時間に利用できるよう周知する。	・場所が遠い、時間がないなど図書室に行くことが面倒な生徒もいるので移動図書室(コンテナ等で教室をまわる)を導入して気軽に本を手にできる環境づくりをしてみてはどうか。 ・図書館まつりは盛大に行われており、今後も続けていただきたい。 ・積極的に授業等で図書室の利用をすすめてほしい。 ・読書感想文コンクールやおすすめ本の紹介など、引き続き取り組んでいただきたい。

平成２９年度　学校評価総括表　　伊丹市立　荒牧中学校

教育目標	自主、自立、感謝の精神を抱き、未来を拓く生徒の育成　　～豊かな心、確かな学力、健やかな体を育てる～
重点目標	①確かな学力の育成　②豊かな心・健康な体の育成　③開かれた信頼される学校づくり

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
豊かな心・健やかな体	不登校への対応	・不登校生徒数を減少していけるように、個々に応じたきめ細かい対応をする。	・「1日目の欠席」でも理由により家庭訪問を行うとともに、保護者との連絡のため粘り強い働きかけを行う。 ・「２日目の欠席」は、家庭からの連絡の有無にかかわらず、担任が放課後家庭訪問する。 ・「３日目の欠席」は、家庭からの連絡の有無にかかわらず、担任と学年教師が家庭訪問をする。 ・「４日目以降、連絡しての欠席」は、他の職員の支援を得て、いっそう保護者との連携に努める。 ・心と体のアンケート内容の充実を図り、アンケートを実施し、指導に生かす。 ・職員間で連携を取り複数で対応するとともに、関係機関との連携を積極的に行う。	・不登校生徒数を前年度と比べ、増加させないように取り組みを続けていく（増加が０％以下にする）。かつ、生徒アンケートにおいて「学校に行くのが楽しい」と回答した割合が80％以上にする。	C	・「欠席者への対応」に即して、欠席者に対して具体的な行動をとることができた。 ・生徒アンケートにおいて、「学校へ行くのが楽しい」と肯定的に答えた生徒が、前期が78％なのに対して後期は75.7％であった。 ・職員間で生徒の情報共有ができていないことがあった。	・人間関係を構築するのが苦手な生徒が多くなってきているので、学級活動，学年の活動をとおし、積極的に支援していきたい。 ・「保健室利用カード」「10日以上欠席生徒への取り組みシート」を活用し、見通しを持って生徒に接する。	・不登校生が増加している現状をふまえ、学校だけでは対応が困難になりつつある。地域の人材（民生委員等）を活用し、連携してみてはどうか。 ・教育委員会と連携し、メンタルフレンド等の積極的な活用をしてはどうか。 ・不登校はその期間が長くなると学校復帰が難しくなる傾向がある。各先生方の意識を高くし、早期対応に努めることが大切である。
	生徒指導	・組織的な生徒指導に取り組む。	・生徒指導係会を定期的に開催し、全職員が同一歩調で指導するよう努める。 ・毎時間校内巡回を行う。 ・係会での確認事項を学校・学年での共通理解事項としていく。 ・生徒に関しての情報交換を密に行う。	・保護者、生徒アンケートにおいて「学校は適切に生徒指導をしている」と回答している割合を保護者90%，生徒85％以上にする。 ・教職員アンケートにおいて「組織的に対応できる体制が整っている」と回答する割合を85％以上にする。	B	・保護者、生徒アンケートにおいて「学校は適切に生徒指導をしている」と回答している割合が保護者82.7％、生徒84.9％とどちらも達成目標を下回っている。 ・教師アンケート「組織的に対応できる体制が整っている」と回答した割合が78.4％と昨年を下回っている。 ・生徒指導に関する情報の共有がなされていないことが組織的な対応につながらず、アンケート数値の低下につながったと考える。	・学年内、学年間、生徒指導主事、管理職との報・連・相を随時、適切に行う。 ・生徒指導事案について、すぐに情報共有、対応できる体制を学年内に設ける。 ・4月当初の「生徒指導推進計画」「生徒指導具体的方針」を確認し、徹底して行う。 ・自主研修を活用し、事例研修を行う	・相互の連絡体制の確立と、情報共有の仕方の工夫が必要である。情報の電子化に取り組んでみてはどうか。 ・ケース会議を開き、子どもに関する情報をいろいろな立場で共有することは今後も続けていただきたい。 ・スマートフォンやＳＮＳについて入学してすぐに１年生全体に指導してはどうか。
	いじめへの対応	・いじめの未然防止、早期発見、早期対応に取り組む。	・アンケートの選択肢に「現在～感じている」を入れる。その結果、期間が限定されるので生徒が答えやすくなる。 ・教育相談やアンケート調査を実施し実態把握を行い、早い対応を行う。 ・ＱＵアンケート１回目終了後に活用法について研修し、今後の学級経営に生かしていく。また、学年でも情報を共有する。	・いじめられていると感じない生徒をり100％に近づける。 ・いじめられていると感じる生徒を０にする。	B	・いじめられていると感じない生徒は95％と目標を達成することができた。ただし、「とても感じる」の項目を0％にすることができず、「いじめられていると感じる」生徒が5％いた。 ・いじめられた被害者だけでなく加害者にも目を向けていく必要がある。 ・「学校へ行くのが楽しい。」と回答している生徒が75.7％で20％以上の生徒が楽しくないと回答している。学校や教室が心の居場所になるようにしなければいじめの起こらない雰囲気にはならない。	・いじめの認知件数を増やし、小さな芽から摘んでいく意識を持つ。　・学級が安心・安全で心の居場所となるように、学級経営について研修を積む。 ・QUについて、学年で情報を共有する機会を設け、生徒理解につなげる。休み時間や給食の時間を活用し、生徒とコミュニケーションを密にとる。	・いじめを原因とする不登校の増加が世間では話題となっている。単純にいじめ問題と片付けられず、生徒指導担当、不登校担当との連携を視野に入れた指導を徹底していただきたい。 ・小学校時代からのいじめなどは、入学後に適切に対応できるだけの情報を小学校と共有し個別に対応するなど、子どもたちが安心して学校生活を送ることができるようにしていただきたい。
	道徳教育の充実	・「心の教育」を推進する。	・道徳を中心に全ての教育活動を通じて、命の大切さ、相手を思いやる心を育む。 ・指導案や教材を学年で共有できるようにする。 ・「朝のあいさつ運動」をはじめ、教育活動全般であいさつの定着を図る。	・「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらっている」の割合を85％以上にする。	B	・「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答した生徒が前期は90.7％、後期は84.9％で平均して85％を超えた。前期と後期の差は、道徳の指導内容の時期による違いや、行事の後かどうか等による生徒の意識に違いがあると考えられる。つまり、啓発するとことまではできているが、実際に身につくところまでは指導できていないのではないかと考えられる。 ・今年度はローテーション授業を行うことで、道徳授業に対しての教師の意義や国語力が高まった。また、道徳の授業を通じて、担任以外の教師が生徒と人間関係を作ることができた。	・アンケートの文言を「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてもらい、日々自分も他の人も大切にしようと心がけている」にする。 ・「自分を大切にする」をテーマにした道徳の授業を行う。 ・「１人１人を大切に」する学級経営を行う。 ・「自分を大切にする」心を育てることを意識して日々の教育活動を行う。	・道徳の教科化にともない、教師側のスキルアップが課題となる。校内研修等を入念に行った状態で指導にあたっていただきたい。 ・道徳には、学校の担うところと家庭の担うべきところがある。この部分を明確にした指導を行うべきである。

平成２９年度　学校評価総括表　　伊丹市立　荒牧中学校

教育目標	自主、自立、感謝の精神を抱き、未来を拓く生徒の育成　～豊かな心、確かな学力、健やかな体を育てる～
重点目標	①確かな学力の育成　②豊かな心・健康な体の育成　③開かれた信頼される学校づくり

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
豊かな心・健やかな体	体力の向上	・自ら進んで体力を向上させようとする生徒を育てる。	・体育の授業を通して、体力の向上を図るとともに、自己の健康面に対する意識を高める指導を行う。 ・部活動では競技力の向上に努める。 ・教師からの説明を分かりやすく簡潔にまとめ、活動時間を増やす。	・スポーツテストバッジ受賞者は3年生70%、2年生60%、1年生30%を目指す。 ・タイムトライアルの自己ベストタイムを80%以上にする。 ・保健だよりについては、熱中症やインフルエンザなどの主要なものについてもHPに掲載し、より細かい情報を発信する。	B	・教師からの説明を分かりやすく簡潔にまとめ、活動時間を増やすことができた。 ・スポーツテストバッジ受賞者は3年生56%、2年生47%、1年生29%であった。3年生の受賞率が昨年を下回った。 ・タイムトライアルは、トップ10と自己目標の2つの評価を設け、苦手な生徒も前向きに取り組んでいた。 ・昨年改善方法として挙げた、体育大会後からタイムトライアルまでの時間で5分間走は授業時数の関係で実施することができなかった。	・部活動では競技力の向上に努める。 ・保健だよりについては、怪我や感染症などだけでなく、学校生活で気になることなど幅広い面での気付きをHPに掲載する。 ・3年生は部活引退後、授業でのトレーニング回数を増やすなどして体力の維持に努める。 ・体育大会終了後からタイムトライアルまでの授業で5分間走を実施する。	・最近では外で遊ぶ子どもが少なくなっているため、子どもたちの体力向上には学校教育が欠かせなくなっている。今後も体力向上について頑張ってほしい。 ・部活動の在り方について、スポーツ庁からの通達等をふまえ適切に対応をしていただきたい。教師、生徒双方に有意義な部活動になるようにしていただきたい。
開かれ信頼される学校園	学校情報の積極的な発信	・積極的に学校情報を発信する。	・オープンスクール週間や、授業参観を実施し保護者や地域の意見を学校運営に活かす。 ・学校だよりを発行し地域にも配布する。 ・学校ホームページをタイムリーに更新し、学校情報を積極的に発信する。 ・保健だよりなどを通して、健康管理の啓発を行う。	・学校だよりを発行する。 ・自校のホームページをタイムリーに更新する。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が90%以上になる。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した保護者の割合が80%以上となる。	A	・「学校は、学校の情報を学校だよりやHPを通じて保護者に伝えている。」と回答した保護者が93.4%であった。 ・上記の結果を上回るよう、情報発信（学校だより、ホームページの生徒会、部活動、学年だより、お知らせ等）をさらに充実したものにすることが課題である。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が84.2%であった。 ・保護者アンケートにおいて、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した保護者の割合が82.8%で、昨年の74.3%より向上している。）	・アンケート結果や保護者の意見を考慮し改善していく。 ・情報発信（学校だより、ホームページの生徒会、部活動、学年だより、お知らせ等）をさらに充実したものに改善する。 ・家庭訪問や懇談会等で出た意見等を必要に応じて学年、学校内で共有し、改善できるものについて手だてを講じる。	・情報発信については、高い評価を受けていると評価している。 ・学校からの情報発信は定期的にされているので、今後は内容の充実に取り組んでみてはどうか。 ・来年度よりメール発信システム「ミマモルメ」の活用にあたってのルールづくりが必要ではないか。

学校関係者評価総括

・前年度に比べC評価が１つ増加している点が気にかかる。「学習習慣の獲得」でC評価は、学習の根幹に関わる事項のため検証が必要と考える。あとの項目については、全体的にB評価(目標どおりに達成できた)との自己評価であり、学校の取り組みとしては頑張っていると評価できる。荒牧中学校の研究では、学習規律、協同学習の取り組み等、長年に渡り研究を積んできている。１１月２０日には、研究発表会を開催し、いままでの研究の成果を発表したと聞いた。先生方の授業改善に関する研修がすすみ、落ち着いた学習環境の中で学習活動が展開されていることがよくわかる。また、数年前から始まった「毎学(My学)ノート」の取り組みは、近隣の小学校まで広がり、「WEEKLY宿題」や「コミュニケーション・トレーニング」についても着実に成果があらわれているようである。より一層の学力向上に努めていただきたい。また、今年度から始まった給食については、運営上の問題点が多くあったようだが、現在では順調に運営されていると聞いている。今後も「食育」を通して子どもたちの成長を見守っていただきたい。

次年度に向けた重点的な改善点

・新しい指導要領をふまえ、これまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善・工夫を行う。「めあての明示」「振り返り活動」等、子どもたちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育んでいくことが必要である。また、学習習慣については、個別対応をベースに、教師が粘り強く指導にあたる工夫をすれば、今年度と違った取り組みになっていくと考えられる。また、平成３１年度からの道徳の教科化を受けて、授業の進め方や評価の仕方を十分研修し、適切な指導が行える準備も必要である。子どもたちの活動では、行事への取り組み等で、成果が目に見える形で工夫をすることで「生きる力」の育成にも繋がる。荒牧中学校がめざす学校運営を管理職が中心となって、教職員全体へと広げ、学校教育目標の具現化をめざしていただきたい。

自己評価の基準　　Ａ：目標を上回った　Ｂ：目標どおりに達成できた　Ｃ：目標をやや下回った　Ｄ：目標を大きく下回った